

漢詩で旅する淀川

―「淀川兩岸一覽」の漢詩―

新稲 法子

はじめに

「淀川兩岸一覽」は、淀川の水運や当時の旅の様子を知る上で欠かせない資料であるとともに、引用された漢詩や俳諧に注目すれば、淀川の船旅というテーマのアンソロジーとして読むことができる。特に、挿絵とそこに添えられた漢詩や俳諧は、案内記として説明的な文辞を省かなければならない制約から離れる分、読み物としての性格をより強く備えていると言えるだろう。

稿者は平成二十七年六月二十日、市立枚方鍵屋資料館において特別講座「漢詩で旅する淀川」を担当し、「淀川兩岸一覽」所収の漢詩を紹介した。本稿はこの特別講座をもとに、採録された漢詩の特徴を明らかにし、「淀川兩岸一覽」の成立について考察を加えるものである。

「淀川兩岸一覽」とは

「淀川兩岸一覽」は、くだりふねのまほのぼりふねのまほ下船之巻・上船之巻それぞれ上下の二巻四冊からなる。著者については後に詳述するが、あかつきのかねなり曉晴翁（一七九三―一八六一）（晴翁は、あかつきのかねなり曉鐘成の暹曆以降の号）、画は「撰津名所図会」などの挿絵を手がけた松川半山。版元は江戸の山城屋佐兵衛・京都の俵屋清兵衛・大坂の河内屋喜兵衛であり、文久元年（一八六一）・文久三年（一八六三）・刊記不明本が現存する。(一)

書名こそ「名所図会」ではないが、その体裁・内容から本書は名所図会の一種であるといえる。名所図会の大半は「撰津名所図会」「河内名所図会」というようにに国ごとに作られるが、「東海道名所図会」「西国三十三所名所図会」のように国をまたぐものもある。本書は後者で、書名が示す通り、京大坂間、山城・摂津・河内の淀川沿いの地名を順に取り上げ、寺社・名所・古跡や景勝地について記したものである。

地名に関しては、上船之巻は大坂から京、下船之巻はその逆に並んでいる。向きが違っただけで同じルートではあるが、重複が気にならない構成になっている。これは、凡例に「何れも船中より見たせし右を圖して其順に一覽せしむ」（上船之巻上巻）とあるように、常に右岸の名所を取り上げているためである。

名所図会には珍しい本書の発想の元になったのは、葛飾北斎の「絵本隅田川兩岸一覽」だと考えられる。「絵本隅田川兩岸一覽」は上中下三冊、高輪大木戸から吉原まで、隅田川を上る際、右岸に広がる二十五の景色を描き、当時流行の狂歌を添えたものである。刊年は不明であるが、寛政末から文化初めの作とされている。

鐘成はこの「絵本隅田川兩岸一覽」に影響されて、既に文政七年（一八二四）に「澁川兩岸勝景図会」を上梓している。「淀川兩岸一覽」もまた、「絵本隅田川兩岸一覽」にその発想を借りたものであろう。「淀川兩岸一覽」の「兩岸一覽」という書名と、常に右岸の名所を取り上げ

るといふ趣向は、『絵本隅田川兩岸一覽』を踏襲しているからである。

この『澁川兩岸勝景図会』は上巻が桜ノ宮から天神橋を経て蟹島まで、下巻が高麗橋から難波橋を経て渡辺橋までで終わっている。下巻の末尾には「これより下を一巻となし全部三巻を四季に題してあらわすべきところ、こゝより下甚広大にして一巻にうつし得がたく(略)後篇二巻となし日を経ず発板なせば川筋の半にて終るをうたがひ玉ふことなかれ」とあるが、「全部三巻を四季に題してあらわす」というのは、春の景色を描いた上巻、夏景色の中巻、秋・冬の下巻三冊からなる『絵本隅田川兩岸一覽』を意識したものであろう。

ここにいう統編は出版されなかつたようである。画家鐘成は『澁川兩岸勝景図会』において澁川の全貌を描き終えることはできなかつた。しかし、四十年近くの時を経て、松川半山という若い才能を得た鐘成は『澁川兩岸一覽』を世に出したのである。

『澁川兩岸一覽』の漢詩

実用書でもある『澁川兩岸一覽』には、冒頭と挿絵にあたかも澁川の船旅というテーマのアンソロジーのように、当時の著名な作者による詩歌が記されている。以下、これら『澁川兩岸一覽』の漢詩について、いくつかを引用しながら紹介しよう。

まず、上船之部上巻の冒頭に、山本洞雲の七言律詩が掲げられている。

浪漫長橋二百町

浪は長橋を浸す二百町

春陰未霽是何虹

春陰未だ霽れず是れ何の虹ぞ

金城卷雨吞斜日

金城は雨を巻きて斜日吞み

碧殿穿雲繩大空

碧殿は雲を穿ちて大空に繩る

千店閭閻換地列

千店の閭閻は地を換して列なり

一條周道到京通

一條の周道は京に到りて通ず

年年眺望思無盡

年年々々眺望して思ひ尽くることなし

南國魚鹽歷洛中

南國の魚鹽洛中を庄す

山本洞雲は江戸前期の儒者、生没年は未詳であるが、天和二年(一六八二)の朝鮮通信使一行と漢詩を贈答している。この詩は延宝四年(一六七六)に上梓された『難波十二景』のうち「波橋晚景(波橋の晚景)」と題する一首で、瀟湘八景に倣ったものである。『難波十二景』には「難波橋ノ上ニテ晩方ニ四方ノ舳ヲ見ルコトヲ詠ス」と始まる注があり、長橋は難波橋のことである。漢詩では橋をしばしば虹にたとえる。金城はもちろんだ坂城である。

『澁川兩岸一覽』は船旅の出発点である大坂から始まる。洞雲のこの詩は、六句目の「一條の周道は京に到りて通ず」が終着点である京へと繋がって、『澁川兩岸一覽』の冒頭にふさわしい。

さて、『澁川兩岸一覽』の挿絵は見開き二丁、または半丁で計六十八点ある。その内訳は、上船之巻の上巻が二十点、上船之巻の下巻が十八点、下船之巻の上巻が十六点、下船之巻下巻が十四点となっている。挿絵には漢詩・和歌・狂歌・俳諧・川柳が添えられており、そのうち漢詩は二十四首採録されている(別表)。

地誌や名所図会など名所の由緒来歴を説明する文章に文芸が引用されるのは一般的なことである。『澁川兩岸一覽』も同様に、本文中に『土佐日記』等の古典や歌集などが引用されている。

(別表)『淀川兩岸一覽』挿絵の詩歌作者

	挿絵	漢詩作者	狂歌作者	俳諧作者	その他作者
ノ 1	1丁裏・2丁表 大坂 八軒屋	篠崎樂(竹陰)		芙蓉	
ノ 2	5丁裏・6丁表 松之下 京橋 豊前嶋	篠崎樂(竹陰)			
ノ 3	6丁裏・5丁表 其二 片町 京街道 川崎 渡口				
ノ 4	7丁裏・8丁表 其三 網島	釈慈周(六如)		沙鷗	
ノ 5	8丁裏・9丁表 其四	荒井公廉(鳴門)		蒼虬	
ノ 6	11丁裏・12丁 川崎 桜宮		正裕	翠翁	
ノ 7	12丁裏・13丁表 其二			貞柳 西柳亭	
ノ 8	13丁裏・14丁表 毛馬				
ノ 9	15丁裏・16丁表 赤川		江戸家風	醒花	
ノ 10	16丁裏・17丁表 守口 駅 新川		洲勝任 百尺		
ノ 11	19丁裏・20丁表 佐太 天満宮	荒井公廉(鳴門)	江戸寿庵		
ノ 12	22丁裏・23丁表 三島江 渡口		忠秋 力丸		
ノ 13	25丁表 伊加賀				
ノ 14	25丁裏・26丁表 其二 牧方 駅泥町	嶋(中島) 棕隠	江戸平秩東作		
ノ 15	26丁裏・27丁表 其三		鬼拉亭力丸		
ノ 16	27丁裏・28丁表 其四 牧方 渡口 西岸大塚へ渡す	田勢	江戸有大甚		
ノ 17	32丁裏・33丁表 楠葉渡口			宇鹿	
ノ 18	34丁裏・35丁表 橋本			其角	(香川) 景樹(和歌)
ノ 19	35丁裏・36丁表 其二	嶋(中島) 棕隠	古俣	尚白	
ノ 20	37丁裏・38丁表 狐 渡口	(熊谷) 荔斎		梅室	
【上り船之部・下】					
ノ 21	1丁裏・2丁表 よどのおもはし 淀 大橋			鞭石 歌城	

ノ 22	3丁裏・4丁表	よどのしろ おんちや 淀城 御茶屋			梅室 言水	
ノ 23	4丁裏・5丁表	其二	釈(大潮)元皓		由水 梅室	
ノ 24	5丁裏・6丁表	其三	岩垣彦明(竜溪)	冬降		
ノ 25	6丁裏・7丁表	其四 みづぐるま 水車		雪儘	宗因 言水	
ノ 26	6丁裏・7丁表	其五			惟然 鬼貫 順也	
ノ 27	7丁裏・8丁表	其六 こはし 小橋			千山	
ノ 28	10丁裏・11丁表	ふしみ きやうばし 伏見 京橋		アハ大原改袖彦		
ノ 29	12丁裏・13丁表	ごんじやうじ ぞく あかくさでら 欣浄寺 俗に深草寺ともいふ			醒花	
ノ 30	14丁裏・15丁表	すみぞめ あり まいなり 墨染 有馬稻荷		鶏成		
ノ 31	16丁裏・17丁表	ふぢのもり わかれみち 藤 杜岐道			南谿	
ノ 32	17丁裏・18丁表	ふしみ ふぢのもり やしろ 伏見 藤森 社				
ノ 33	19丁裏・20丁表	ほうたうし 宝塔寺				
ノ 34	21丁裏・22丁表	ふしみ いなりの やしろ 伏見 稻荷 社	祇園瑜(南海)			
ノ 35	22丁裏	其二			尺草	
ノ 36	24丁裏・25丁表	とうよくじ つうてんきやう 東福寺 通天橋			弁石 信徳	
ノ 37	26丁裏・27丁表	だいぶつもんぜん みみづか 大仏門前 耳塚	餘易		兎土 柳亭	
ノ 38	32丁表			江戸塵外楼	宗永	

【下り船之部・上】

ク 1	1丁裏・2丁表	さんでうのはし 三條橋			梅室 若夢	
ク 2	2丁裏・3丁表	しでうのはし 四條橋		風翁	霞川	
ク 3	3丁裏・4丁表	ごでうのはし 五條橋			芹舎 支考	
ク 4	5丁裏・6丁表	いなり おたひしよ 稻荷御旅所		千回合鶴成		
ク 5	7丁裏・8丁表	たけだのわかれみち あんらくじゆあん 竹田分道 安楽寿院				
ク 6	9丁裏・10丁表	やなぎのちやま くるまみち 柳 茶屋 車道			如行 文賀 衆曾 桃只	
ク 7	10丁裏・11丁表	たかせがは 高瀬川	島(中島)棕隠		飄々 一知 舎菴	

ク 8	11 丁裏・12 丁表	ひがしたげだ ふちのちやや 東 竹田 藤茶屋		力丸	伴水園 柳亭 塘里	
ク 9	13 丁裏・14 丁表	ふしみ ふなやど 伏見 船宿	島 (中島) 棕隠 (2 首)	アハ猿人	露川	
ク 10	15 丁裏・16 丁表	よどつみ ぞく せんりやうまつ 淀堤 俗に千両松といふ			翠翁 士朗 和及	
ク 11	17 丁裏・18 丁表	よどのこばし よどひめのやしる 淀 小橋 淀姫 社	嶋 (中島) 棕隠			
ク 12	20 丁裏・21 丁表	おほやまざき てんわうざん くわんせんじ たからでら 大山崎 天王山 観音寺 宝寺	知西 韓中秋 (谷口藍田)		沂風 醒花	
ク 13	22 丁裏・23 丁表	かみまき ほんちやうじ 上牧 本澄寺			許六 沾圃	
ク 14	23 丁裏・24 丁表	うどの 鶴殿		力丸	蕪村	
ク 15	25 丁裏・26 丁表	まへしま 前島		赤襟姫成		
ク 16	26 丁裏・27 丁表	おほつか 大塚				(香川) 景樹 (和歌)

【下り船之部・下】

ク 17	1 丁裏・2 丁表	みしまえ 三島江			猿鯉	藤原頼家 (和歌)
ク 18	3 丁裏・4 丁表	はしらもと いなりやしる 柱本 稻荷 祠			醒花	
ク 19	4 丁裏・5 丁表	とりかひ ふじのりのじんじや 鳥飼 藤杜 神社				(小林) 歌城 (和歌)
ク 20	8 丁裏・9 丁表	えぐら うたづか きみだう 江口 哥墳 君堂			魯白 呉逸	
ク 21	9 丁裏・10 丁表	さかまき はしでら しんかほ 逆巻 橋寺 新川			山川	
ク 22	11 丁裏・12 丁表	くにじま さらしつみ 柴島 晒堤	嶋 (中島) 棕隠	鶏成	芦泊	
ク 23	13 丁裏・14 丁表	ながら みつがしら わたし 長柄三ツ頭 長柄川 同渡口		江戸行成	我黒	
ク 24	15 丁裏・16 丁表	むむらづつみ ひのくら 木村堤 樋之口	嶋 (中島) 棕隠		りん 芭蕉	
ク 25	16 丁裏・17 丁表	其二		半休		作者名なし (川柳)
ク 26	18 丁裏・19 丁表	げんばちのわたし 源八 渡口	後藤梅園			
ク 27	20 丁裏・21 丁表	かわさきのはま 川崎 浜			中島花情	
ク 28	21 丁裏・22 丁表	おんざいしくら はぎばし 其二 御材木蔵 萩橋	嶋 (中島) 棕隠	源田 蟹人		
ク 29	23 丁裏・24 丁表	あそものいちば てんじんばし 粟藪市場 天神橋	広瀬 謙 (旭荘) 嶋 (中島) 棕隠			
ク 30	24 丁裏・25 丁表	なにばし なべしまのはま やまざきの はな 其二 難波橋 鍋島之浜 山崎之鼻		煤原	伴水園 (芹舎)	

対して挿絵には、比較的新しい時代の文芸が添えられている。そもそも、挿絵に狂歌が四首も採録された鬼拉亨力丸は松川半山の父であるなど、「淀川兩岸一覽」は暁鐘成を中心とする文雅の集いの中で誕生した書物であったといえる。当時活躍していた文人や、古くともよく知られた文人の作品が採録されているのである。

こういった作品について、「大阪淀川探訪 絵図でよみとく文化と景観」の「淀川兩岸一覽」と同時代の文学」には、「さらに、混沌詩社の作品が多く紹介されています。混沌詩社は、片山北海を盟主とする、大坂の著名な文人達がつどう漢詩サロンでした」とある。しかし、混沌社の盟主片山北海は「淀川兩岸一覽」が出版される七十年以上前の寛政二年（一七九〇）に没していて、同時代の人物とは言い難い。「淀川兩岸一覽」では同時代の作品はもちろん、古い作品の中にも混沌社の詩人として知られている作者のものはない。

上り舟の出発点大坂で、当時の代表的な詩人といえば篠崎竹陰や広瀬旭荘であった。上船之部の一首め、ノ1（以下、上船之部は上下巻を通して「ノn」、下船之部も同様に「クn」の記号を用いる。別表参照）「大坂 八軒家」、続くノ2「松之下 京橋 豊前嶋」の二首は篠崎竹陰（？）一八五八）の作である。竹陰は江戸の人だが、大坂で篠崎小竹に学び、その次女と結婚して家学を継いだ。「淀川兩岸一覽」が出版される三年前、安政五年に五十代で没している。混沌社の社友であった篠崎三島は竹陰の祖父に当たる。ノ1「大坂 八軒家」の七言絶句を掲げよう。

八軒屋畔客乗船

八軒屋畔 客船に乗り

三大橋頭薄暮天
多少行人蓬底夢
一齊輾破水輪邊

三大橋頭 薄暮の天
多少の行人 蓬底の夢
一齊 輾破す水輪の辺

八軒屋の船着き場から三十石船に乗るころ、浪華の三大橋のほとりは夕暮れ時。たくさん旅人たちは咎を尋いた舟の中で夜を迎えて眠っているが、京の手前、淀までやって来ると、水車の回る音が旅人たち全員のも夢を破るのだ。

三大橋頭は浪華の三大橋（難波橋・天神橋・天満橋）のほとりの意。水輪は水車。ここでは淀の水車を指す。

ク29「菜蔬市場 天神橋」の七言絶句は広瀬旭荘（一八〇七）一八六三）の作である。旭荘は豊後国日田の人で、広瀬淡窓の弟。大坂で塾を開いていた。この詩は安政三年に刊行された「梅墩詩鈔四編」巻一に「浪華雜詩十九首」其の五「天満菜市」と題して収録されている。

世習酒酒越修奢
世習酒酒 奢侈に趨り
管新薦異競相詩
新を管め 異を薦め競ひて相詩る
詩人欲賦苦無例
詩人賦せんと欲して例無きに苦しむ
九月龍孫十月瓜
九月の龍孫 十月の瓜

豊かな大坂では人々は初物や変わった食べ物を喜び、九月に春の味覚の筍が、十月に夏が旬の瓜が売られている。天満の青物市を詩に詠もうにも、伝統的な表現がなくて困ってしまうのだ。結句、龍孫は筍の異名である。

このように、挿絵に添える漢詩はピンポイントにその名所の特徴を踏まえて詠んでいることが求められるため、中国の古典にない、日本の淀川流域独自の風物を漢詩の形で表現しなければならぬ。まさに「詩人賦せんと欲して例無きに苦しむ」題材が見られるのである。淀川を上下する舟に食べ物を売っていた所謂くらわんか舟を詠んだ中島棕隠（一七七九—一八五五）の七言絶句、ノ14「其二 牧方駅泥町」はその典型的な例である。

土人賣食盃瓜皮

土人食を売つて瓜皮を盃す

嘲罵募錢何所歎

嘲罵錢を募る何の歎く所ぞ

倘惡不嫌如嚼蠟

倘惡嫌はず蠟を嚼むが如きを

恰供支膝倦眠時

恰かも供す膝を支へて眠りに倦む時

地元の小さな煮売り舟がゆらゆら近付いてくる。「飯くらわんかい。酒飲まんかい」と口汚なく商売し、代金をごまかされたりはしない。粗末で味がしないような煮物だけれど、まあ悪くはないだろう。ちょうど狭い三十石船で、膝を抱えて眠れずにいたところだ。

起句、土人は土地の住民の意味。現在のよ様な差別的なニュアンスはない。瓜皮は瓜皮船、簡単な造りの小舟のこと。承句、くらわんか舟の食事の料金は碗の数で計上されたため、客の中には碗を川に捨ててごまかす者もいたという。

もう一首、ク24「木村堤 樋之口」を掲げよう。

櫻宮行樂正花多

櫻宮の行樂正に花多し

笑語聲流春夜波

笑語声は流る春夜の波

紅燭青簾何處客

紅燭青簾何れの処の客ぞ

猶停遊舫在横坡

猶は遊舫を停めて横坡に在り

転句、芸者を呼んで酒宴を開いているのはどの旅人だろう。屋形船であろうか、桜ノ宮で優雅に春の宵を楽しむ人々を、棕隠は羨んで横目で眺めているのである。

中島棕隠は京都の人、中島家は伊藤仁斎の高弟であつた曾祖父中島浮山以来、儒学の名家である。棕隠は伴蒿隣に国学を、村瀬栲亭に儒学を学ぶ一方で、祇園を詠んだ竹枝詞で若い頃から詩才を知られ、頼山陽と匹敵した漢詩はもとより、狂詩など多方面で活躍した。大坂の老松町（現在の大阪市北区西天満）に別宅を持っていたため、京大坂を行き来する生活が、このような漢詩を生み出したのであろう。

棕隠は「淀川兩岸一覽」に最も多くその作を採録されている詩人であり、先に挙げた二首の他にはノ19「橋本 其二」、ク7「高瀬川」、ク9「伏見 船宿」二首、ク11「淀小橋 淀姫社」、ク22「柴島 晒堤」、ク28「川崎浜 其二 御材木蔵 萩橋」、ク29「菜蔬市場 天神橋」の計十首にのぼる。これらの七絶はク7・ク28を除き、全て「棕隠軒四集」上に収められている「自伏水到浪華舟中作十首（伏水より浪華に到る舟中の作十首）」と題する連作から採られている。その対応は次の通り。

自伏水到浪華舟中作十首 「淀川兩岸一覽」

() 内は初句

其一（茶壺煙喧吹碧漪…）ク9 下船之卷上 伏見 船宿

- 其二 (曲曲桃花蘸綠雲…) ク9 下船之卷上 伏見 船宿
 其三 (酒暖茶檣又一灣…) ク11 下船之卷上 淀小橋 淀姫社
 其四 (一帶女塙松影均…) (淀の水車)
 其五 (英雄陳跡看崢嶸…) (天王山)
 其六 (神澗溶溶匹練清…) ノ19 上船之卷上 橋本
 其七 (土人賣食盪瓜皮…) ノ14 上船之卷上 牧方駅 泥町
 其八 (半篙春碧滑無聲…) ク22 下船之卷下 柴島 晒堤
 其九 (櫻宮行樂正花多…) ク24 下船之卷下 木村堤 樋之口
 其十 (言是名都第一橋…) ク29 下船之卷下 菜蔬市場 天神橋

こうして見ると、棕隠の連作「自伏水到浪華舟中作」は実に十首中八首が採用されており、「淀川兩岸一覽」挿絵の漢詩はこの連作が軸となっていると言っても過言ではない。

常に右岸の名所を記す「淀川兩岸一覽」では橋本は上船之巻に掲載されている。棕隠の時は題名が示すように下り船で詠まれたものであり、右岸・左岸の制約はないから、ノ19「橋本」とノ14「牧方駅 泥町」の時は、順序が入れ替っている。これらの時は上船之巻に収録されているが、実際は逆方向に進む下り船の舟中で詠まれたものである。

この連作以外については、ク28「川崎浜 其二 御材木蔵 萩橋」の七言絶句は「棕隠軒二集」に収められている。「己卯二月弊社小集以春曉爲詩題余偶有憶三都之舊遊因各撮其景趣賦此三絶(己卯二月弊社小集、春曉を以て詩題と爲す。余偶たま三都の旧遊を憶ふ有り。因りて各おの其の景の趣を撮し、此の三絶を賦す)」と題する「角田川」「難波江」「賀茂川」の三首の七絶のうちの「難波江」である。己卯は文政二年(一八一九)。

また、ク7「高瀬川」の七言律詩は、「高瀬舟中作」と題して「棕隠軒四集」では「自伏水到浪華舟中作」の直前に収められており、連作と同時に詠まれたと推測される。「棕隠軒四集」では肥舟についての長い割り注がある。

棕隠が祇園を詠んだ竹枝詞「鴨東四時雜興」に倣って、大坂の竹枝詞を上梓したのが荒井鳴門(一七七五―一八五三)である。鳴門は阿波の人で淀藩儒。ノ5「其四(網島)」とノ11「佐太 天満宮」の七言絶句は鳴門の作であり、ともに「浪華四時雜興」に収められている。ノ5の七絶を挙げよう。

- 城北網洲漁父郷 城北の網洲 漁父の郷
 酒樓宛在水中央 酒樓宛として水の中央に在り
 魚膾蟹螯知不乏 魚膾蟹螯 知りぬ乏しからざるを
 妓舟維得柳絲長 妓舟 維ぎ得て柳糸長し

網洲は網島の漢語的表現。「鴨東四時雜興」の向こうを張った「浪華四時雜興」にふさわしい竹枝である。鳴門の「浪華四時雜興」には中島棕隠が叙を寄せており、両者には接点があったことがわかる。

次に掲げるク12「大山崎 天王山 観音寺 宝寺」の七言絶句は韓中秋こと谷口藍田(一八二二―一九〇二)による。肥前有田の人で、郷里に私塾嶺山書院を開き、肥前鹿島藩の藩校弘文館の教授などを務め、晩年には東京に私塾藍田書院を開くなど教育に尽力した。作者鐘成より二十九歳年下の、かなり若い世代であるが、門人の恩地轍による「藍田谷口先生傳」には「二十一歳日田を辞し大坂に遊び篠崎小竹、藤澤東咳

を見る」「途京師を過ぎて中島棕隴、牧信侯を訪ひ遂に江戸に入る」とあり、「淀川兩岸一覽」関係者との接点が見られる。篠崎小竹はノ1・ノ2の作者、竹陰の男である。

窃窺漢城臨水灣

豐公會此蕃瑤顏

關中詩指天王色

是我當年破賊山

窃窺たる漢城水灣を臨む

豊公會て此に瑤顏を蕃ふ

關中詩りて指す天王の色

是れ我當年賊を破るの山

太閤秀吉がかつて美しい御室茶々を住ませた淀城。この淀城で天王山を示しながら、あれが私が明智光秀を討つた山だと誇らしげに語ったことだろう。

漢城は淀城。漢は淀川を表す。隅田川を表す瀬と同様に、日本の川を表すために作られた国字である。

このように当代の作が中心である「淀川兩岸一覽」の挿絵の漢詩だが、その名所にふさわしいものであれば作者との接点がない世代の詩人も採録されている。

例えばノ34「伏見 稻荷社」の五言古詩は祇園南海（一六七六―一七五二）の作である。

神門臨大道

元午晨盤辰

祀典險群社

三燈福萬春

神門大道に臨み

元午晨盤辰

祀典群社に瞻え

三灯万春に福す

楓杉青錦地

楓杉青錦の地

更宜吟望人

更に吟望の人に宜し

南海は紀州藩儒で、漢詩の他、文人画でも知られている。この詩は「南海先生文集」巻一の「漏盡菴六景爲烏石山人賦六景在京師東山（漏盡菴六景、烏石山人の為に賦す。六景は京師の東山に在り。）」六首のうち第一首「稻荷社」である。伏見稻荷を詠んだもので、第二句の元午は初午、稻荷社の祭りの日のこと。「南海先生文集」では「三燈見後拾遺神詠〇楓杉用周防内侍歌意（三灯、後拾遺の神詠に見ゆ 楓杉、周防内侍の歌の意を用ゆ）」という注が付いている。前者は「後拾遺和歌集」惠慶の

いなり山みつの玉垣うちたき我がねぎことを神もこたへよ

後者は「夫木和歌抄」所収の周防内侍の

いなり山杉まの紅葉きてみればたゞあを地なる錦なりけり

を指している。

以上、一部ではあるが、「淀川兩岸一覽」に採録された漢詩を見てきた。本文では一般の名所図会と同様に、名所の由緒を伝えるのに古典的な書物を引用することが多い。これに対し、未だ人物を特定できない作も僅かに残っているが、全体的な傾向として、挿絵では作者と繋がりのある当代の作品が大半を占め、世代を遡るにしても古さを感じさせないものであった。「淀川兩岸一覽」の挿絵の漢詩の多くは、まさに当時の淀川

を詠んだものなのである。

「淀川兩岸一覽」の漢詩の特徴

淀川そのものは、はるか昔から漢詩に詠まれてきた。唐風文化が栄えた平安時代前期、嵯峨天皇が現在の大山崎に構えていた離宮を詠んだ作品はよく知られている。この離宮は淀川の北岸にあったことから、黄河の北岸の河陽県に見立てて河陽離宮と称せられた。優れた漢詩人でもあつた嵯峨天皇が河陽離宮で詠んだ「河陽十詠四首」と、それに和した臣下の作品は、『文華秀麗集』巻下に収められている。「河陽花」と題した御製を掲げよう。

三春二月河陽縣

えんしよん にがつ 三春 二月 河陽縣

河陽從來富於花

かやう 從來 花に富む

花落能紅復能白

はなおち 能く紅に復た能く白し

山嵐頻下萬條斜

さんらん 頻りに下りて万条斜めなり

唐の河陽は桃が多く植えられていたことで有名だが、この七絶もそのイメージを元に詠まれている。

この後も都と大坂を結ぶ淀川は漢詩に詠まれてきたが、『淀川兩岸一覽』の挿絵では引用されていない。「淀川兩岸一覽」が引用するのはあくまでも、三十石船の船旅を楽しむ近世後期の庶民の旅人が共感して鑑賞できる作品であつて、同時代か、さほど古くないものなのである。

ところで淀川の船旅を詠んだ漢詩といえば、藤井竹外（一八〇七—一八六六）の「花朝下澱江（花朝澱江を下る）」と題する有名な七言絶句がある。

句がある。

桃花水暖送輕舟

ちかみ 水暖かにして輕舟を送る

背指孤鴻欲沒頭

はいし 孤鴻 欲せんと欲する頭

雪白比良山一角

ゆきは白し比良山の一角

春風猶未到江州

しゅんふう 猶ほ未だ江州に到らず

まるで「桃花源記」を思わせるような田園風景である。「背指」の「指」は向きを示し、実際に指さすかどうかは問わない。春の渡りの群れから離れた一羽の雁が次第に小さく見えなくなっていく比良山方面を背にした方向に、船が進んでいくのである。

竹外は高槻藩士、頼山陽に漢詩を学び「絶句竹外」と評された。「花朝澱水を下る」は竹外の詩集「竹外二十八字詩」の冒頭の一首であり、高槻現代劇場の傍らにある竹外の旧居跡の碑にも刻まれている代表作である。現在でも詩吟の定番として親しまれている。

おそらく竹外はこの七絶を高槻あたりから大坂へ向かう下り舟に乗って詠んだのであろうが、はっきりした地点はわからない。このように淀川の風景や船旅を題材とする漢詩は珍しくはないが、詠んだ場所を特定できるものはそう多くはない。「花朝澱江を下る」については、場所が特定できないからこそ広い流域で普遍性を持つ名吟となったのであるが。

これに対し、『淀川兩岸一覽』の名所ごとの挿絵に添える漢詩には、ピンポイントにその名所の特徴を踏まえて詠んでいることが求められる。そのため、中国の伝統的な漢詩に詠まれることがなかった日本の卑

近な題材を取りあげることも多くなる。

竹外の「花朝下澱江」に詠まれているのは、「比良山」や「江州」という日本の地名が詠み込まれているのを除けば、陶淵明の世界を思わせる理想の田園風景における船遊びである。三十石船は全長が二十メートル足らず、幅二・五メートルほどの船内に、漕ぎ手四人、乗客が二十八人の定員であったという。乗客同士かなり密着した、あまり風流とは言えない三十石船の船旅は、「花朝下澱江」からは読み取れない。

『淀川兩岸一覽』の漢詩は、文学の世界における理想の船旅を詠むのではなく、一つ一つの名所を写實的に詠むことを志向している。こういった点から見ると、ノ14「牧方駅泥町」の、くらわんか船を詠んだ中島棕隠の七絶などが、『淀川兩岸一覽』に採録するのにふさわしい作風だと言えよう。

棕隠はこのような卑俗な題材を好む詩人であった。淀川の船旅を、各地点の特徴を取りあげて写實的に詠むとなると棕隠の独擅場であり、『淀川兩岸一覽』で二十五首のうち十首を占めているのも頷ける。

「花朝下澱江」という淀川の名吟を残した竹外は、ク29「菜蔬市場天神橋」の広瀬旭荘と同じ文化四年生まれ。まさに同時代人であるが、その名高い淀川の詩を採録していないところに、卑近さを厭わず名所をピンポイントで詠むという挿絵の詩の条件が窺えるのである。

『淀川兩岸一覽』と平塚騷斎

卑近な題材を詠むのが難しい漢詩に対して、進んでそのような題材を取りあげるのが狂詩である。『淀川兩岸一覽』下船之巻上には十四丁裏・十五丁表見開き全面に、王震起の「三十石夜船行」と題する狂詩が掲載

されている。以下に挙げよう。

船宿相連京橋傍	船宿相連なる京橋の傍
目印行燈每軒行	目印の行灯軒毎に行なる
有登有下三十石	登る有り下る有り三十石
或去或來旅客忙	或は去り或は来たりて旅客忙はし
出般煎茶水泥臭	出だせがら煎茶の水泥臭く
八杯豆腐當齒剛	八杯の豆腐齒に当たつて剛し
按摩上烟呼歩賣	按摩上烟呼び歩いて売
鼻紙楊枝於婆商	鼻紙楊枝於婆商ふ
支度已調暇乞濟	支度已に調ふて暇乞濟み
持荷若者送入艚	荷を持って若ひ者送つて艚に入る
管低恰如撥下住	管低くして恰も撥の下に住むが如く
立欲着替數縮亢	立つて着替へんと欲して數々亢を縮む
借切胴間雖稍廣	借り切る胴の間稍広しと雖も
不異餒頭詰重箱	異ならず餒頭を重箱に詰むるに
虱虫數千道移瘰	虱虫數千道ひ移りて瘰く
蒲團三帖糊殊強	蒲團三帖糊殊に強し
船頭歸自中昏島	船頭中昏島自り歸りて
取棧出時夜已央	棧を取り出て出すとき夜已に央なり
高聲叱云勿出手	高声に叱りて云ふ手を出すこと勿れ
早早可消挑燈光	早々消す可し挑灯の光
乘合口口諸國話	乗り合ひ口々諸國の話
或歌或笑聲皆張	或は歌ひ或は笑ふて聲皆な張る

巫女山伏ト笠者

四國道者西國娘

何處素干交狐臭

紛紛傳來鼻難當

銘銘用心巾着切

合膝刺跡互怕狼

一樣着眼肝疑癖

誰人寢言全如狂

風寒波響世間靜

犬吠遙過淀川防

誠哉色本思案外

風与見得隣寢嬌

月影賺窺胸幾躁

年頃過盛器量好

一向難留息子勢

無分別起竊奪裳

枕上急呼如雷落

愕兮引手舉首望

起兮起兮寢惚聾

沽餅飲酒喰牛房

追追醒目何居負

橫平買取助空腹

傍若無人惡口吐

法外雜言不足惶

みこやまよしうらやさん

しこく せしやうさいくしよ

いすの ところ 素干か狐臭に交り

紛紛 伝へ来て 鼻当たり難し

銘々 用心 巾着切

膝を合せ跡を刺して互いに狼を怕る

一樣 眼りに着いて 肝癖を疑ふ

誰人の 寢言か 全く 狂の如し

風寒く 波響きて 世間静かに

犬吠えて 遙かに 過ぐ 淀川の防

誠なる 哉色は 本と 思案の外

風与見得たり隣に寝る嬌

月影に賺し窺て胸幾と躁ぐ

年頃盛りを過ぐれども器量好し

一向留め難し息子の勢ひ

無分別起こつて窃かに裳を奪れば

枕上急に呼びて雷の落つるが如し

愕 手を引いて首を挙げて望めば

起きよ起きよ寢惚の聾

餅を沽へ酒を飲め牛房を喰へ

追々目を醒まして何ぞ負けて居ん

横平に買ひ取りて空腹を助く

傍若無人に悪口吐く

法外の雜言も惶るるに足らず

惜夫已到大事處

田舎百姓無下妨

其跡難往寢不就

爲野暮風思故郷

堪喜暮暗無人見

一夜懇切互不忘

上陸如散蜘蛛子

右往左往去四方

女中久因 忍 小便

八軒屋頭雪隠長

惜ひかな巳に大事の処に到りて

田舎の百姓無下に妨げしを

其の跡往き難し寢も就ず

野暮な風を爲して故郷を思ふ

喜ぶに堪へたり暮暗にして人の見る無きを

一夜の懇切互いに忘れず

陸に上がりて蜘蛛の子を散らすが如し

右往左往四方に去る

女中久しく小便を忍へるに因りて

八軒屋の頭雪隠長し

作者の王震起は平塚飄齋（一七九四〜一八七五）である。飄齋は京都

町奉行所与力を務める一方、詩文に優れ、中島棕隠と親しかった。王震

起をはじめ、棕隠の狂詩サークルの戯名のいくつかは飄齋だと推測され

ている。この「三十石夜船行」は文政四年に刊行された狂詩集「太平三

曲」に収録されているが、四十三句目の「追々」は「銘銘」になつてい

る。「銘々」は二十七句目にも用いているので、「淀川兩岸一覽」では重

複を嫌って直したのだろう。

飄齋が文政五年に記した随筆「病間漫筆」の一部、親類に面会するた

め大坂を遊歴した際の日記「浪華見物枯苔の日記」には「三十石夜船行」

を思わせる記述が多い。例えば「三十石夜船行」の按摩と於婆は、「浪

華見物 枯苔の日記」の船宿の描写「又門の方よりとす声高く、根深か

しら芋水菜、土産物入らんかな。へ万病一切の薬、按摩肩から尻迄もん

で十六文とよび来、中二も女の菓子売己が着たる木綿鳴の糊こわに、は

しやぎたる唇にて、へちり紙、半紙、おらうそく、火打、お舟から上つてお草履、大きな美柑、饅頭、おたばこ、ほくち、附木など、昔間にさゝづる行々子のごとくかしましくすゝむる、いとうるさし。」に当たるものであろう。

平田雅樹氏は「中島棕隠の晩年(二)」において平塚飄齋について触れ、「淀川兩岸一覽」の成立には平塚飄齋が深く関与したと述べている。

「淀川兩岸一覽」は、暁晴翁(鐘成)著・松川半山画で文久元年に上梓されたものだが、著者・画師ともに「再撰花洛名勝図会」(元治元年刊)に携った人物。「花洛」の実際の著者は飄齋であったが永發居中ゆえ名を匿したことは周知の事実であり、「淀川」も同様の出版物であったように思われる。実際、「淀川」の序文を撰した「颯々老人(津久井)」は飄齋であり、この本の成立に深く関与したことは間違いない。「三十石夜船行」の作者王震起が実は飄齋であったからこそ、異例の大ききで収録し、字句の変更も可能だったのであろう。ちなみに「淀川」には棕隠の時も多く引用されているが、これも編者が飄齋であった故のことと思われる。

「淀川兩岸一覽」の「実際の著者」が飄齋であったかはしばらくおくとして、挿絵の詩歌の選択について鐘成が飄齋の意見を聞かなかつたとは考えがたい。文雅に優れた飄齋はクア「高瀬川」では自ら颯々の名で句も寄せているが、漢詩についても京都随一の詩人だった中島棕隠と親しく、飄齋の意向を取り入れるのが自然であらう。「淀川」には棕隠の時も多く引用されているが、これも編者が飄齋であった故のこと

という平田氏の推測は正しいと考える。

以下、漢詩の採録に飄齋が関わっていた証左になり得る点を二点、指摘しておきたい。まず、棕隠の連作「自伏水到浪華舟中作」についてであるが、既刊の「棕隠軒四集」ではなく別の物で見たと推測される。というのも、「淀川兩岸一覽」の棕隠の漢詩には平仄や韻の誤りが見られるからである。

まずク11「淀小橋 淀姫社」の七絶だが、仄起式で詠まれているので

●○○○○●

●●○○○○

轉船退行橋脚間 艇を転じて退行す橋脚の間

の二字目は仄声でなければならぬ。しかし「船」は平声で、二六対、二四不同の規則に反している。「棕隠軒四集」ではこれは正しく仄声の「艇」になっている。

またク29「菜蔬市場 天神橋」の韻については、

言是名都第一橋、萬竟轟地夜猶多、

舟船隨處皆堪泊、箇箇樓燈照暗潮、

傍点の「橋」「潮」の韻は下平声二蕭(平水韻)であるが、「多」は下平声五歌で韻が合わない。これについても「棕隠軒四集」上では「多」ではなく下平声二蕭の「饒」になっており、韻は揃えてある。

つまり、「淀川兩岸一覽」に棕隠の作品を採録した人物は「棕隠軒四

【集】に収録した形ではなく、まだ草稿段階の作品を見ていたわけである。そのようなことは親しい人物でないとは不可能であろう。飄齋の「病間漫筆」には「ひと比詩を作る事を学びて、棕隠中嶋先生の削正をうけたりし」とあるだけでなく、「又親族のほか来訪の人ありといへども、多くは病にかこつけて対面せず。毎にしたしく談ずる人は、棕隠先生、梅價翁、宇隆子是等の両三人に過ぎず」とあり、棕隠とは非常に親しかったことがわかる。

【淀川兩岸一覽】と同時期に上梓された「再撰花洛名勝図会」の例言で飄齋は「詩歌俳句の類は曾て余が記憶する所、又友人の寄贈に随ひ余白を填むるに過ぎず」と記しており、「淀川兩岸一覽」についても事情は同様である可能性が高い。森統三は「平塚飄齋の研究」において、平塚家に伝わる飄齋の写本を紹介している。扉に「嘉永七年甲寅正月ヨリ 香籍表題抜萃録五編 飄々山人記」と記されたその書の安政四年十月十四日の項には、「近世和歌三十六家傳二冊、川喜田(ママ)眞彦稿本借用」などとあるといひ、親しい間柄では稿本を借りることもあったことがわかる。棕隠は安政二年に亡くなっているが、飄齋が参照したのは、あるいは生前の棕隠から贈られた草稿かもしれない。

もう一点、飄齋が挿絵の漢詩を採録したと推測する根拠として、六如の扱いが挙げられる。

釋慈周こと六如(一七三四〜一八〇二)は天台宗の僧で、慈周は法名。唐詩風から宋詩風への詩風転換に大きな影響を与えた詩人でもあり、晩年は京都に住まいした。【淀川兩岸一覽】ではノ4「其三 網島」の五言絶句が六如の作である。

風急捲寒濤
風急にして寒濤を捲き
空水踏離別
空水踏として別ち離し
西北雲纒開
西北雲纒かに開けば
連山悉作雪
連山悉く雪と作る

先に見てきたように、「淀川兩岸一覽」の漢詩の選択は、飄齋と親しかった棕隠の作が圧倒的に多いとはいえ、おおむね妥当なものだと言えらる。篠崎竹陰らは交遊がある同時代人であるが、大坂在住の詩人として飄齋でなくとも選んだであろう。一世代前の詩人についても、例えば山本洞雲の「難波十二景」など、それぞれの名所を詠んだ、採録されるにふさわしいものばかりである。

しかし、その中で一首だけ、何故採録したのか疑問が残る作品がある。それがこの六如の五絶である。実はこれは網島を詠んだものではない。「六如庵詩鈔」巻五に「伏水舟中二首」と題して収められた一つで、伏見での作なのである。これまで見てきた作品とは異なり、その場所ならではの風物を捉えていたり地名を詠み込んでいたりはいない。網島の雪景色の挿絵にも風景が合うことから転用したのであろうが、他にはこのような例はない。

しかし、いささか強引に六如の作品を採録したのは、飄齋が関わっていたからだとするは納得がいく。森統三は「飄齋の書物の覚之書」の安政二年三月十二日には「拙老近年六如詩鈔の外決して他集手に取不申候。」とあるという。六如は飄齋にとって特別の存在だった。また、飄齋の漢詩の師でもあった棕隠にとっても六如が特別な存在であったことは、若き日に詩才を認められたエピソードで知られている。

『淀川兩岸一覽』の本文については平塚飄齋がどこまで関与したかはわからないが、挿絵の漢詩の選択については、以上のことから飄齋が担当したと推定できるのである。

まとめ

本稿では『淀川兩岸一覽』の挿絵の漢詩について、当代の作が大半を占め、ときには卑近になっても写實的に各名所を詠んだものであるという特色を明らかにし、作品の選択には平塚飄齋の関与についてその証左を指摘した。

飄齋は既に指摘されている本作と『再撰花洛名勝図会』の他、『宇治川兩岸一覽』の執筆にも深く関わっているとされる。文久元年（一八六一）の『淀川兩岸一覽』、同三年（一八六三）の『宇治川兩岸一覽』、文久二年（一八六二）の『再撰花洛名勝図会』と、幕末に次々と出版された名所図会に飄齋は関わったことになる。経済的な理由などがあつたのかもしれないが、それにしても、飄齋を続々と出版された名所図会に向かわせたものは何だつたのであろう。

町奉行与力としての飄齋は、養の人であつた。世古恪太郎は「唱義聞見録」で飄齋について「大坂に大塩平八郎、京に平塚と称せられたり」と記している。天保の飢饉の際、飄齋は鳩居堂主人熊谷直恭、北小路三郎らと三条河原に救小屋を建てるなど、積極的に窮民救済に当たつた。その様子を描いた「荒歳流民救恤図略記」について、平成二十七年七月三十一日、京都新聞朝刊の連載「京の学院 山本説書室の世界」で失われたとされていた原本が紹介されたのは記憶に新しい。

飄齋は幕政を批判し、安政の大獄で連座、三年後の和宮降嫁の恩赦で

許されるまで永蟄居の身であつた。京都の名所を記録する名所図会に情熱を向けるようになったのは、このことがきっかけになつたのではないか。目立つ活動をするのではなく、激動の時代にかつての美しかった風景を記録しておこうという意識があつたのではないだろうか。飄齋の人物とその執筆活動については、今後の研究が俟たれるテーマだと考えている。

名所図会は現在、研究者以外にも広く知られており、『淀川兩岸一覽』も同様である。そこに記された情報は文化遺産として現在の町づくりにも役立つことが期待される。しかしながら、挿絵に添えられた文芸、特に漢詩については、まだ十分に読解されているとは言いがたい。本稿では数首を紹介するに留まつたが、他の作品についてもより正確な註釈と分析が求められよう。

註

(一) 影印と翻刻に柳原康夫『淀川兩岸一覽 宇治川兩岸一覽』（柳原書店、一九七八年）がある。本稿の翻字もこれを参照したが、一部異なるところがある。特に漢詩については旧字体の白文と通行の字体による書き下し文の体裁で引用した。

(二) 早稲田大学図書館古典籍総合データベース。翻刻は稿者に拠る。

(三) 船越政一郎編撰校訂『難波叢書12地誌』所収、浪速叢書刊行会、昭和二年（一九二七）。

(四) 西野由紀・鈴木康久編『大阪淀川探訪』人文書院、二〇二二年。

(五) 富士川英郎編『詩集日本漢詩11』所収、汲古書院、一九八七年。

- (六) 富士川英郎編『詩集日本漢詩12』所収、汲古書院、一九八七年。
- (七) 斎田作樂編『竹枝詞集集成2』所収、太平書屋、二〇一五年。
- (八) 谷口藍田著・谷口豊五郎編『藍田遺稿』所収、一九〇三年。
- (九) 笹原宏之『国字の位相と展開』三省堂、二〇〇七年。
- (一〇) 松下忠緒『詩集日本漢詩1』汲古書院、一九八七年。
- (一一) 未詳は次の二人。ノ16田勢。田は修姓であろうか。ノ37餘易。あるいは通信史かと思われる。
- (一二) 『群書類従266文庫部124』所収。
- (一三) 北村学『竹外二十八字詩評釈』全国書房、一九六七年。詩題は「澱江」を「澱水」とするテキストもあるが、正集である「竹外二十八字詩」に従った。
- (一四) 片仮名のルビについては原文にあったものを生かし、『太平三曲』も参照して補った。
- (一五) 森統三・野間光辰・中村幸彦・朝倉治彦編『随筆百花苑5』所収、中央公論社、一九八二年。
- (一六) 平田雅樹「中島棕隠の晩年(二)」、「太平詩文」第68号、太平書屋、二〇一六年一月。
- (一七) 『棕隠軒四集』は刊年不明、富士川英郎氏は「天保二、三年頃の出版であろうか」と推測(『詩集日本漢詩12』解題)している。
- (一八) 森統三「平塚飄斎の研究」、『森統三著作集2』所収、中央公論社、一九七一年。
- (一九) 佐野正巳他編『詩集日本漢詩8』所収、汲古書院、一九八五年。
- (二〇) 水田紀久氏は「未冠の棕隠がその門(村瀬栲亭 稿者注)」を叩いた頃はすでに五十歳前後であったが、この先達に従って東山

高台寺の詩会に赴いた際、たまたま六如に出会ってその詩才を認められたことは生涯の想い出であった(『錦莊隨筆』巻四)。」と述べている。水田紀久『江戸詩人選集 葛子琴・中島棕隠』解説、岩波書店、二〇〇二年。

(二一) 『再撰花洛名勝図会』については次の論文がある。西野由紀「再撰花洛名勝図会」の作者と全体像」、『国文学論叢』(龍谷大学国文学会)第51号、二〇〇六年二月。

(二二) 野口勝一編『野史台維新史料35雑』所収、一八八七〜一八九六年。復刻、『日本史籍協会叢書別編35』、東京大学出版会、一九七五年。

(にいな・のりこ 佛敎大学非常勸諭師)